

教養の変貌 - 現代演劇における

山下純照
成城大学

社会的存在である人間にとって、他者への共感や「相手の身になってみる」能力が必須の「教養」であることは言うまでもない。演劇学者ファーガソンのいう「演技的感受性」（『演劇の理念』山内登英雄訳、未来社、1958年）が、それを支えるものであり、演劇を通じてこの種の感受性が養われることは基本的な認識だろう。個人ないし小規模な集団内でのコミュニケーションを支えるこうした演劇的能力の有用性は、しばしばより大規模な社会集団、引いては「国民」を構想する際にも論拠とされてきた。例えば18世紀末、ドイツの詩人フリードリヒ・シラーは「演劇はすべての身分と階層を一つに結びつけ、頭脳と心情へのもっともよく踏みならされた道を有している [...] 要するに、われわれが国民劇場を有するならば、そのときわれわれは一つの国民になる」（「良き常設劇場には本来いかなる効果があるのか」1785年）と書く。しかしこうした教養主義はその後、限界が指摘される。野田宣雄は「十八世紀以来『精神労働を過大に評価し、営業活動を軽蔑する』ところの『大学出の市民』das studierte Bürgertumが急速に台頭してきたことを『社会的病気』として捉え、この排他的な階層の形成が国家と社会の制度におよぼす不安定的な効果につよい憂慮をしめした」、リールの説を紹介している（野田宣雄『教養市民層からナチズムへ』名古屋大学出版会、1988年）。この「社会的病気」こそは、後年の全体主義の台頭を教養市民層が防げなかった理由だった。

さらに、教養としての演劇というテーゼに対する根強い批判もある。近年クリストフ・メンケはそれをプラトンにまでさかのぼり、テアトロクラシーの概念で論じた。「哲学は、『演劇が生モデルとなるかもしれない、それどころかすでにそうなっている（そして、演劇都市であるアテナイは、まさにそれゆえにスパルタに劣っている）』という恐れを駆り立てる。哲学的な懸念は演劇の支配に向けられている。テュキュディデスとプラトンはこの支配を「シアトロクラシー」（Theatrocratie テアトロクラティア）と呼び、それによって、ルソーからキルケゴールとニーチェを経てベンヤミンとドゥボールに至る近代の著者たちの途絶えることのない系列にキーワードを残した。彼らはこのキーワードのもとに、近代の政治・文化・社会が演劇のようになったという批判的な診断を表現した。（メンケ, C. 「演劇の批判と弁護」（田中均訳。大阪大学大学院文学研究科美学研究室『a+a 美学研究』12号 特集「シアトロクラシー 観客の美学と政治学」2018年3月 14-15）。

現在、教養としての演劇の可能性を考える議論は、以上のような、演劇は社会的分断を越えて全体主義の防波堤となり得るのかという批判、そして実質的にそれと重なるテアトロクラシー批判に応答するものでなければならぬ。こうした観点から現代演劇の実践を見ると、2つの有力な取り組みが浮上する。

一つは公立劇場における運営戦略である。静岡県芸術センター（SPAC）の宮城聡は、上記の問題の文脈を意識しつつ、異議申し立ての時代だった1960年代の演劇に連なる、「オルタナティブ」な演目を演劇祭の軸にしながら、同時に県民への積極的なアプローチによって孤高のアヴァンギャルドに陥ることを避ける方針を明確に打ち出している。

もう一つは演劇の内容の問題として、ポストドラマ的演劇のもつ広義の政治的戦略である。永田靖はそうした一つとして台湾の林文中振付・演出の『小南管』を例に挙げつつ、そこではある伝統音楽の継承プロセスが、観客も含め、異質性を含んだ多様な関係者それぞれの視点で共有されることを指摘し、このようなタイプを「新教養主義の演劇」と呼んでいる。

これらの取り組みは、近代国家の起源にあった教養主義の限界を越えるものとして評価できるものである。発表では、さらに中村雄二郎がチェーホフの劇において指摘した「コロスの知」にも触れて、（メンケが言うようには）テアトロクラシーの問題があくまでも上演の次元に属するわけではなく、戯曲のドラマトルギーとしても応答可能な問題であることを論じた。